

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00186

研究課題名（和文）物語画家としてのヤン・ブリューゲル（父） 美術史的ナラトロジーの新たな試み

研究課題名（英文）Jan Brueghel the Elder as a Storyteller

研究代表者

平川 佳世（HIRAKAWA, Kayo）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：10340762

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：ピーテル・ブリューゲル（1525年頃～1569年）は、「大ブリューゲル」として我が国でも著名であり、生き生きとした農民画などで新機軸を打ち立てた。実は、その次男であるヤン・ブリューゲル（1568年～1625年）もまた、父親と同じく優れた画家であり、とりわけ、動植物や風景の専門画家として、生前より今日に至るまで高く評価されている。本研究では、ヤン・ブリューゲル（父）の「物語画」にあえて着目し、これまで等閑視されてきた本領域における活動実態を詳らかにするとともに、17世紀ヨーロッパにおける「物語画」の豊かなありかたを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、いままで等閑視されてきた、「物語画家」としてのヤン・ブリューゲルの活動実態を明らかにすることで、この17世紀の巨匠についての美術史的理解を一層深めることに貢献した。さらに、同時代や先達の物語画家に大いに学ぶ一方、美しい風景の中を「旅する人々」など従来の「物語画」概念にとらわれない「新しい物語画」を創出したヤン・ブリューゲルの柔軟な制作態度を解明することで、伝統的芸術観が見落としてきた17世紀ヨーロッパの豊かな文化的諸相を明らかにした。異文化理解を、芸術作品とそれをめぐる歴史的資料の分析を通じて深める研究は、現代のグローバル化社会における多文化共生の一助となると考える。

研究成果の概要（英文）：Jan Brueghel the Elder (1568-1625), the younger son of Pieter Breugel the Elder (ca. 1525-1569) who is well-known in Japan as "the Great Breugel", was also an excellent painter. Jan Brueghel has been highly esteemed, especially as a specialist of animals, plants, and landscapes paintings from his contemporary times until today. The research focused on Jan Brueghel's history paintings and clarified Jan's activity in this genre which scholars have overlooked. In addition, the study explored various aspects of narrative paintings in Europe in the seventeenth century.

研究分野：西洋美術史

キーワード：西洋美術史 17世紀 ブリューゲル 物語画 物語 芸術観 油彩画 風景画

1. 研究開始当初の背景

ヤン・ブリューゲル(父)(1568年 - 1625年)は、「花のブリューゲル」あるいは「ピロードのブリューゲル」の異名が端的に示すように、精緻に描かれた花の静物画や煙るような色彩に彩られた風景画、生气溢れる動物画によって、汎ヨーロッパ的な名声を博した画家である。クラウス・エルツのモノグラフ研究を受けて(Klaus Ertz, *Jan Brueghel der Ältere: Die Gemälde mit kritischer Oeuvrekatalog*, Cologne, 1979)、花、動物、風景の専門画家としてのヤン・ブリューゲル(父)の活動については、多くの優れた研究がなされている(Leopoldine van Hogendorp Prosperetti, *Landscape and Philosophy in the Art of Jan Brueghel the Elder*, Farnham, 2009等)。また、画家の専門化と分業が進んだ17世紀のネーデルラントにおいて、ヤン・ブリューゲルはルーベンスを始めとする人物画家たちと積極的に共同制作を行っており、これに着目した研究も盛んである(Anne T. Woollett and Ariane von Suchtelen, *Exh. cat., Rubens & Brueghel: A Working Friendship*, Los Angeles and The Hague, 2006等)。こうした研究の盛況に比べて、ヤン・ブリューゲル(父)が描く物語画に対する美術史学の興味・関心は、あまり高くはない。

私はこれまでの研究の過程で、華やかな花の静物画や上質な風景画の影に隠れて見過ごされがちではあるが、ヤン・ブリューゲル(父)の描く物語画は、主題解釈や細部描写、物語叙述法において、実は、かなり複雑な操作がなされているとの知見を得た。ヤン・ブリューゲル(父)が単独でまたは人物画家と共同で、聖書や古代ギリシア・ローマ神話、同時代文学等の文学的典拠に基づいて制作した物語画はおよそ100点、その数は決して少なくない。加えて、文学的典拠の有無は不明ではあるが、なんらかの物語的な語りを行うモチーフが挿入された風景画や動物画も多数現存する。つまり、静物や風景など、当時発展しつつあった新しい絵画分野におけるヤン・ブリューゲル(父)の先取性は確かに際立つものの、西洋において古来より絵画術の重要な役割とされた物語画を描くという行為もまた、ヤンの画業において決して周知的・副次的なものではなかったのではなからうか。むしろ、17世紀後半のフランス・アカデミーにおいて確立し、その後、隠然と存在し続けた、人物の専門画家が制作する物語画を絵画諸ジャンルの頂点に位置づけ、風俗画や風景画、静物画をそれに劣るものとみなす絵画観の影響下、静物や風景の専門画家として名高いヤン・ブリューゲル(父)が描く質の高い物語表現、およびそれを高く評価したであろう17世紀初頭の豊かな物語画受容の在り方を、美術史学は見過ごしてきたのではなからうか。こうした学術的な「問い」を核心に据え、本研究は構想された。

2. 研究の目的

「物語画家としてのヤン・ブリューゲル(父)」 この言葉は、西洋美術について多少なりとも知識のある者には奇妙に響くことであろう。というのも、かの大ブリューゲル、即ち、ピーテル・ブリューゲル(父)(1525年頃 - 1569年)の息子にして、自身も北方ヨーロッパ美術を代表する画家のひとりであるヤン・ブリューゲル(父)は、何よりも、花の静物画の名手として称賛され、瑞々しい風景や多種多様な動物の描写によって高い評価を受けてきたからである。これに対して、本研究では、ヤン・ブリューゲル(父)の描いた物語画の包括的な調査研究を行う。それにより、これまで等閑視されてきたヤン・ブリューゲル(父)の本領域における活動実態を

明らかにし、大ブリューゲルの伝統を継承しルーベンスと同時代を生きた画家独自の物語描写法・叙述法を解明することを目的とする。さらに、人物画家が描く物語画を頂点とする絵画観において見過ごされてきた文化的文脈を再構成するとともに、物語画分析についての新たな研究モデルを提示する。

3. 研究の方法

本研究は、ヤン・ブリューゲル(父)が制作した物語画について、現存する諸作品のデータ・ベース化と解析、重要作例の事例研究、同時代の証言の検証という3つの手法を組み合わせで行われる。その際には、次の5つの点が重要となる。

- (1) 作品データ・ベースの構築とその解析
- (2) 伝統的な物語画の学習
- (3) 人物画家との共同制作からの刺激
- (4) 同時代の美術理論や芸術愛好家たちの評価との関わり
- (5) 風景画などにおける物語表現

4. 研究成果

ヤン・ブリューゲル(父)の父親である大ブリューゲル、即ち、ピーテル・ブリューゲル(父)は、聖書や神話、民間伝承、諺などを題材に、ファン・エイク以来のネーデルラントの造形伝統を統合し、重層的な意味内容を含蓄する優れた物語画を制作していた。しかし、ピーテルはヤンが幼少の折に死去したため、ヤンは父親から画家教育を直接的には受けていない。加えて、父親の遺した絵画制作資料の多くは長男であるピーテル・ブリューゲル(子)が相続する一方、兄弟間の競争を避けるために、当初、弟のヤンは細密画家としての教育を受けていた。こうしたことから、兄であるピーテル・ブリューゲル(子)が父親の作風を実直に引き継いだのに対して、弟であるヤン・ブリューゲル(父)は、比較的早い時期から父親とは一線を画す物語画を志向したと推測される。その際に参照されたのが、デューラーやラファエロなど、父であるピーテル・ブリューゲル(父)をさらにさかのぼる過去の巨匠達の作品である。

ヤン・ブリューゲル(父)は、1590年代前半のイタリア滞在時には、ラファエロなどのフレスコ壁画や、古典文学や15世紀以来の芸術理論を学習することで、ネーデルラント古来の「地獄絵」を、人文主義的教養を備えたイタリア人愛好家の美的嗜好に合わせて改変し、高い評価を得るに至った。一方、アントウェルペン画家組合に親方登録を果たした翌年の1598年に描かれた《カルヴァリオの丘》(ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク蔵)では、デューラーの著名な素描を援用することで、父ピーテルの同主題作品を上回る複雑な物語描写と、磔刑に処されるイエスと気絶する聖母に鑑賞者の視点を導く祈念画的機能を巧みに両立させることに成功している。加えて、物語画を評価する際に重視された副次的要素の多様性を実現するために、銅板に油絵具で絵を描く最新の絵画形態にも積極的に挑戦し、この絵画形態が潜在的に有する美的価値を十全に提示し、銅板油彩画の発展と普及においても、大きな役割を果たすこととなった。このように、ヤン・ブリューゲル(父)は、初期の頃よりすでに、過去の巨匠の諸作品や芸術理論を丹念に学習することにより、父親の偉業と向き合いつつも、独自の物語画を探求していたのである。

父親であるピーテル・ブリューゲル(父)は、画中の人物や動植物から風景描写に至るまで自らの筆で描き、単独で作品を仕上げた。これに対して、画家の専門分化が進んだ17世紀のネー

デルラントを生きたヤン・ブリューゲル(父)は、人物画家たちと積極的に共同制作を行った。物語要素をもたず、特定可能な実景を描いた、近代的な意味での「風景画」の成立は、17世紀オランダ(北部ネーデルラント)においてであるが、ネーデルラントやドイツでは16世紀初頭にはすでに「風景画」と呼ばれる作品群が存在しており、人気を博していた。しかし、この原初的な「風景画」は、部分的には実景観察に基づきつつも、画家によって再構成されたいわゆる「世界風景」が主であり、画中には聖人伝等の物語要素がちりばめられていた。こうした原初的風景画と、その出現を準備した15世紀の風景表現を収集、分析し、風景表現が当時の鑑賞者に及ぼした作用について、同時代の言説を参照しつつ調査したところ、こうした原初的風景画は単なる鑑賞用風景ではなく、鑑賞者を風景表現に没入させ、そこで展開する物語を追体験させる、いわば仮想空間であったとの知見を得た。こうした仮想空間へ鑑賞者を没入させる原初的風景画の作品構造は、ヤン・ブリューゲル(父)が人物画家と共同制作を行った諸作品にも観取される。とりわけ、フェデリコ・ボッローメオ枢機卿のためにヤン・ブリューゲル(父)とハンス・ロットンハマー(1564年-1625年)が共同制作した作品群では、ロットンハマーが描いた人物像に勝るとも劣らない没入効果をヤンの微細な風景表現が発揮していたことが、ボッローメオ自身の言葉によって裏付けられた。すなわち、ヤンとロットンハマーとの共同制作では、ヤンの風景表現は単なる「背景」ではなく、物語の「場」を仮想現実として提示し鑑賞者を没入させるという重要な役割を果たしていたのである。この新たな知見は、人物画家との「物語画」の共同制作において、人物画家の描く人物像を主とし、ヤン・ブリューゲル(父)の描く風景や自然の描写を従とする先入見を相対化させる。

ヤン・ブリューゲル(父)と人物画家との共同制作により描かれた、この種の仮想空間構築型の「物語画」の特性をさらに明らかにする上で効果的なのが、同時代のドイツ人画家アダム・エルスハイマー(1578年-1610年)の諸作品との比較、および、イギリス人芸術愛好家エドワード・ノーゲートらの著作の分析である。エルスハイマーは、物語の語り手である人物と舞台設定である風景をすべて一人で描くことによって、風景と人物、その他のモチーフが一体となった物語世界を画面上に生み出し、鑑賞者を物語へ没入させることに成功した。一方、ヤンが行った人物画家との共同制作においては、舞台設定と物語の語り手との一体感は失われるものの、個々の描写の卓越さが高く評価されたことが、ノーゲートら同時代の言説から知られる。つまり、人文主義的芸術観においては、「語り」の説得力や巧みさといった、いわば「文学」モデルに準じて物語画が評価される傾向にあったが、絵筆によって物語を「描く」物語画においては、たとえ「語り」の説得力が減じられたとしても、絵画空間への没入を促す諸要素の描写の質を高く評価する価値観も存在していたのである。物語画家や風景画家といった格付けに拘らず柔軟に作品を鑑賞するこうした価値観は、これまでの美術史研究が見落としてきた17世紀の豊かな物語画の在り方の一つの証左である。

総じて、ヤン・ブリューゲル(父)の描く風景画や動物画は、一見したところ、物語表現との係わりは薄いように見える。しかし、発生論的観点から言えば、西洋風景画は物語画の背景表現から派生して成立しており、なんらかの物語主題を含んだり暗示したりすることは、当初はむしろ一般的であった。一方、動物画は博物学的興味に支えられて隆盛したが、博物学的興味をもった受容者は同時に古典文学等にも精通しており、動物を写實的に描いたように見える絵画であっても、何等かの物語的、寓意的要素が込められている場合もある。こうした観点から、1604年、ヤン・ブリューゲル(父)が、当時の学芸の中心地であった神聖ローマ皇帝ルドルフ二世のプラハの宮廷を訪問した際に制作した絵画群、および、訪問時に持参した贈呈用絵画に注目すると、才能溢れる人物画家、風景画家、静物画家がひしめくプラハ宮廷で、ヤンが、風景表現、静物や

動物表現、そして物語表現を巧みに融合させることで、希代の芸術愛好家ルドルフ二世の愛顧を得ようと画策する試行錯誤が明らかとなる。特に、プラハ滞在に刺激を得て描いた作品群の分析から、ヤン・ブリューゲル(父)が、現実の風景に着想を得て、その風景に見合った物語を既存の文学から選択し、物語画を構想する過程が追尾できたことは、大きな成果であろう。人物表現を得意とする通常の物語画家は、物語画制作に際して、人物の身振りや感情表現、配置など、人物主体で構想を練り上げることが一般的である。これに対して、風景表現を得意とするヤンが物語画を描く場合には、まず、各地を逍遥して印象的な実景を写生し、その風景の特性に見合った文学的典拠を求め、登場人物を風景に効果的に配置して物語画として完成させる、という手順を用いていたのである。さらに、同種の物語構造をもつ他の文学的典拠を用いて、同じ風景を用いながらも異なる主題の物語画に仕上げるといったヴァリエーションの制作手法も解明された。例えば、ヤンは、1604年のプラハ滞在の折にプラハ近郊の森で目にした、大木を境に左右に分かれる、印象的な森の分かれ道を写生素描にしたため(大英博物館蔵)この「分かれ道」を利用して「エルサレム入市前のイエス」を主題とする油彩画を制作し(1604年、ウフィツィ美術館蔵)その後、さらに「悪魔に誘惑されるイエス」を主題とする油彩画(1604年頃、ウィーン美術史美術館蔵)を描いている。つまり、分かれ道の実景に触発されて、「歧路に立つ人物」という物語主題が選択されたのである。このように、ヤン・ブリューゲル(父)の絵画制作においては、「舞台設定」を主体に物語が選択されるという、通常の物語画とは逆の制作過程が確認されるのである。

本研究では、さらに踏み込んで、文学的典拠の存在しない「物語画」の存在をヤン・ブリューゲル(父)作品の中に見いだした。通常、西洋の物語画は、キリスト教説話や古代ギリシア・ローマ神話や英雄伝などの文学、つまり、文字化されたテキストに基づき描かれる。とりわけ15世紀以降に普及した人文主義的芸術観では、高尚な文学を理解して適切に絵画化する知的な画家が高く評価された。実際、ヤン・ブリューゲル(父)は、聖書や古典文学などに基づく従来型の物語画を手掛けたことは上述の通りである。一方、ヤンの作品では、風景画に見えるが、同時代の他の風景画に比べると、描かれた人物群が何等かの「出来事」を思わせる行為を行っている作例が存在する。なかでも、新奇性、多様性、作品数で目を引くのが「旅する人々」を描く作例であり、街道を行きかう馬車や徒の人々、河川交通、宿場の様子に大別される。実際、ヤンの居住都市アントウェルペンが交易の要衝であり、「旅」は身近でありつつも非日常を体験する一つの「物語」の場として機能していた。こうした観点から、当時の交易網や史跡の調査などを経て、「旅する人々」を物語画に比肩する入念な感情表現と舞台設定で描いたヤンの作品が、いわば、「現代風物語画」として機能していた、との結論に至った。

本研究は、コロナ禍での海外渡航制限による現地調査の遅延から、研究期間を延長するという予期せぬ事態に見舞われた。しかし、海外渡航制限期間中には、これまで収集した資料や国内に所蔵されている関連作品の精査を充実させることが可能となり、研究計画当初に想定していたより多様で奥深い新知見を得ることができた。今後は、本成果を英文著作に刊行し、国内外の美術史研究の進展に還元する所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 4件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Hirakawa, Kayo	4. 巻 -
2. 論文標題 Jan Brueghel the Elder 's Sojourn in Prague	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Liber Amicorum Gregor Weber	6. 最初と最後の頁 pp. 74-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Hirakawa, Kayo	4. 巻 -
2. 論文標題 Nature and Meditation: Landscape Painting in Early Modern Europe	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Does Nature Think ?	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 平川佳世	4. 巻 1
2. 論文標題 芸術と心の癒し 近世ヨーロッパ美術史研究からの小論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Integrated Creative Studies	6. 最初と最後の頁 pp. 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/278217	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 平川佳世	4. 巻 2
2. 論文標題 「近世初頭のドイツにおける「悲しみの人」の諸相 プライデンヴルフからデューラーへ」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 田辺幹之助編『ヨーロッパ中世美術論集』	6. 最初と最後の頁 403 - 424頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kayo Hirakawa	4. 巻 -
2. 論文標題 "Longing for Eternity: Oil Painting on Copper in a Pre-Modern Global Context"	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Stefan Albl and Berthold Hub (ed.), Close Reading: Kunsthistorische Interpretationen vom Mittelalter bis in die Moderne	6. 最初と最後の頁 pp. 182-189
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 平川佳世	4. 巻 38
2. 論文標題 「ドイツ人画家と銅板油彩画 アダム・エルスハイマーを中心に」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『言語文化』	6. 最初と最後の頁 53 - 71頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 平川佳世	4. 巻 20
2. 論文標題 「前近代の美術と社会 : 工房、組合、市場、政治」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『西洋美術研究』	6. 最初と最後の頁 49 - 63頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平川佳世	4. 巻 1
2. 論文標題 「スプランゲル作《最後の審判》 銅板油彩画の宗教的機能に関する試論」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『京都美術史学』	6. 最初と最後の頁 27 - 64頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 平川佳世	4. 巻 1
2. 論文標題 「近世ヨーロッパ美術と修復 芸術作品の受容史の視点から」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 岩崎奈緒子他編『日本の表装と修理』	6. 最初と最後の頁 371 - 396頁
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 平川佳世
2. 発表標題 近世グローバル社会における銅板油彩画 カルロ・ドルチ作《親指の聖母》に注目して
3. 学会等名 美術史学会西支部例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Kayo Hirakawa
2. 発表標題 Quentin Massys' Money Changer and His Wife Reconsidered: Focusing on "Two Mirrors"
3. 学会等名 Colloquium Money, Medals and Coins as Embodiment of Values in Art (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 平川佳世
2. 発表標題 「ドイツ人画家と銅板油彩画 アダム・エルスハイマーを中心に」
3. 学会等名 『歴史の中の美術 大原まゆみ先生の最終講義に代えての小講演集』 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 平川佳世
2. 発表標題 「人をつなぐものとしての美術 - 前近代の西洋美術に注目して」
3. 学会等名 『京都大学オンライン公開講義 “立ち止まって、考える”』(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hirakawa, Kayo
2. 発表標題 “Nature and Meditation: Landscape Painting in Early Modern Europe”
3. 学会等名 Kyoto University International Symposium: Does Nature Think? (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hirakawa, Kayo
2. 発表標題 “Spranger Copies Fra Angelico on the Copperplate: The Last Judgement for Pius V”
3. 学会等名 VI. Bodensee-Bodoman Art Talks (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hirakawa, Kayo
2. 発表標題 “Longing for Eternity: Oil Painting on Copper in a Pre-Modern Global Context”
3. 学会等名 The Second Joint Workshop Kyoto University University of Vienna (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Toshiharu Nakamura, edited by Kayo Hirakawa	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 320
3. 書名 Inspiration and Emulation: Selected Studies on Rubens and Rembrandt	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>京都大学文学研究科 美学美術史学専修 教員紹介 平川佳世 https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/aesthetics_and_art_history/aah-wah_hiraka/ 京都大学文学研究科 美学美術史学専修 教員紹介 平川佳世 (英語版) http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/en/aesthetics_and_art_history/aah-wah_hirakawa/ 京都大学文学研究科美学美術史学専修ホームページ https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/aesthetics_and_art_history/aah-top_page/ 京都大学文学研究科美学美術史学専修ホームページ (英語版) https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/en/aesthetics_and_art_history/aah-top_page/ 京都大学文学研究科美学美術史学専修西洋美術史教員紹介_平川佳世 https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/aesthetics_and_art_history/aah-wah_hiraka/ Western Art History Academic Staff: Kayo Hirakawa https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/en/aesthetics_and_art_history/aah-wah_hirakawa/ 京都大学文学研究科 美学美術史学専修西洋美術史 教員紹介 平川佳世 http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/aesthetics_and_art_history/aah-wah_hiraka/ Kayo Hirakawa, Kyoto University https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/en/aesthetics_and_art_history/aah-wah_hirakawa/ 京都大学文学研究科 美学美術史学専修 西洋美術史 教員紹介 平川佳世 https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/aesthetics_and_art_history/aah-wah_hiraka/ Kayo Hirakawa, Kyoto University https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/en/aesthetics_and_art_history/aah-wah_hirakawa/</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オランダ	アムステルダム国立美術館			
フランス	社会科学高等研究院			
オーストリア	ウィーン大学			
ドイツ	State Academy of Fine Arts Stuttgart			